『楓花寮物語　～メイドになった少年～』（サンプル版）

主要登場人物

管理人室　若山光樹……主人公の浪人生。女性専用アパート『楓花寮』管理人。
二〇二号室　三島則子……学習塾講師。
二〇五号室　北沢夏……女子高生。

第一話　制服女装デビュー

俺の前に、色とりどりの服が広げられていた。
花柄のワンピース。三段フリルのチュチュスカート。
女子高生制服ブランドのロゴが入ったピンクのブラウスに、ニットベスト。
ウォーターフロント系しか着ないような、大きく胸の開いたドレス。
他にもカジュアル系からカントリー系まで、様々なデザインの服が並んでいた。
そして。
ブラジャー。
キャミソール。
ショーツ。
パンティストッキング。ガーターベルト。
衣類が視界を埋め尽くす様に、胸ふさぐ心地がする。全身にこみ上げる感慨のままに、俺は大きく息をついて言った。

「やっと……洗濯おわったぞぉ」

ここは女性専用アパート「楓花寮」一階。大家が住むための一室で、二階から上の住人と同じような、バストイレ付きの１Ｋになっている。
その六畳間の和室に展開されている女性用衣料の数々は、たったいま管理人室の乾燥機から取りだした服だ。
入居者たちの服である。
「楓花寮」は四階建て、全一五室のうち、七室に部屋が入っている。
築十二年でやや年季が入っており、セキュリティがやや甘い代わり、家賃は安くなっている。そのため近くの大学に通う女子学生や、非常勤講師など、ややお金に余裕がない女性が入居することが多い。
アパートと言ってもここはちょっと変わっていて、管理人が下宿のように、住人の食事・洗濯の面倒をみるサービスをやっている。もともとこの「楓花寮」は学生向きの寮として造られたアパートだったのだが、大学卒業後も居残る人がいたため、気付けば「寮」と言いながら、女性向けの下宿のようなアパートになってしまっていたらしい。
そして俺はつい最近この「楓花寮」の寮父になった。
以来、入居者に対して、食事や洗濯などの世話をしている。
本当のところ、なりたくてなったわけじゃない。

この年で寮の管理人になったのは、親父があちこちに同様の寮を所有するオーナーだからだ。大学建設予定地近くの荒れ地を安く買いたたき、安価な女子寮として作った目端の良さは大したものだと、息子の目から見ても思う。

そして親父は、高校を卒業したものの受験に失敗したばかりの俺に、この寮の管理を任せた。曰く、

「浪人生なら暇だろう」

一言多いと思うが、しかし高校卒業と同時に実家を出て行くのは決めていたので、そんな俺にちゃんと仕事をあてがってくれたのは、感謝している。

以来、俺は前の寮母に代わり、一階の一室に住みながら、食事や洗濯など寮父として彼らの世話をおこなっているわけだ。

しかし、女子寮である。若い女性の集まる禁猟地に、俺のような狼が行ったらいったいどんなことになるのか、いろいろなことを考えたものだ。

すぐに警戒されてしまうのではないか。いや、逆にいくらでも入居者と仲良くなれるチャンスがあるかも知れない。そんなエロゲーをやったばかりだし。

確かに最初は、いろいろな意味で注目された。しかし女の適応力は高く、すぐに家事ロボットのような扱いになった。下着を脱ぎ散らかした部屋の鍵を渡して「掃除お願い」といってくる入居者もいる。

そんなものだよな、うん。

とうぜん、洗い物を頼む程度ではまったく気にしていない人が多い。毎日出る洗い物には、服や下着がどっさりだ。

しかしこの衣類というやつがまた、くせ者だ。ただの布きれのくせに、女性の匂いと体温を伝え、彼女たちの肉体を想像させてやまない。

洗濯物は、他の人と間違えないように番号が書いてあるネットに入れて出す仕組みになっているから、どれが誰の服か一目でわかる。

二〇二号室、三島則子。

大学を出たばかりで、近くの学習塾で非常勤講師をしている。大柄で、目鼻立ちの大きなタイプの美女だ。仕事着はモノトーンのブラウスやスカートが多く、下着は水色やシャンペンゴールドの上品なものだ。パンストも良く出す。

二〇五号室、北沢夏。

高校生で、親元を離れて私立の女子校に通っている。小柄で華奢なタイプだが胸は大きい――巨乳ロリといえば通じやすいか。制服のブラウスやニットベストが中心で、ブラジャーはDカップだが、ショーツは水玉柄のコットンショーツであるあたり、高校生らしい。時々サニタリーショーツが洗濯に出されていて、すこし前に機嫌が悪かった理由が判明したりもする。

三〇一号室、三方原夢乃。

大学生で、心理学専攻の女性だ。縮れ毛で、豪放磊落な性格。服には頓着せず、Tシャ

ツやジャージばかりが洗い物として出されるが、たまに勝負下着とおぼしき総レースのブラショーツセットが混じる。

三〇三号室、田部雪美。

唯一の既婚者で、この近くのブティックでパタンナーをしている。質素で落ち着いた雰囲気、三十代のはずだが未だ若々しい。カントリー調の服が好みらしく、クリーム色やベージュが基調になっている。下着だけは自分で洗濯しているようで、見たことがない。

三〇六号室、物部詠美。

水商売だろうか、昼間はたいてい眠っていて、夕飯を食べてからどこかへ出かける。家賃を滞納することも多い。水商売らしく、メリハリのあるボディを強調する服が多い。下着も赤や紫など、男に見られることを前提にしたものばかり。股割れやTバック、ベビードールなどのセクシーランジェリーも混じる。

五〇二号室、長岡綺羅璃と鈴掛あずさ。

二人とも大学生で、ルームシェアをしている。おおざっぱで派手好きな長岡さんと、神経質で地味な鈴掛さんは相性が悪いように見えるが、喧嘩しながらも上手くやっている。派手めのレーシィな下着と、●学生のようなシンプルな下着が一緒に出されていて、サイズからすると派手な方が長岡さんだ。

五〇六号室、秋山湊。

無口な少女で、とにかく背が低い。一四〇センチくらいだろう。いつも子供服かロリィタのようなふりふりの服を着ている。洗濯もフリルやレースの付いたブラウスが基本で、時々なぜか、スクール水着やブルマーが洗濯されている。下着はアニマル柄やキャラプリントのゴムショーツで、キャミソールは出るがブラは出ない。

うん、ここまで把握しているだけで、充分変態だな。

おそらくネットがバラバラになっても、全員の服や下着を仕分けることが出来るだろう。我ながら驚く。

本当ならもっと、住んでいる人自身のことを知りたいんだけどな。

一応朝夕の食事をともにしているわけだけど、実際に話をすることなんてほとんどない。そりゃ、所詮ビジネスライクの関係だけど――少し寂しかったりは、する。

下着の一枚を手に取る。シャンペンゴールドにレースの花咲くブラショーツセットは、二〇一号室の三島則子のものだ。

ナイロンのすべすべした生地は、触っているだけでチンコがうずく。Dカップのブラジャーも、まるで塑像の鋳型のように、原型を彷彿とさせた。

……本格的に、うずうずしてきた。チンコはさっきから勃起していて、先走りの液が漏れそうだ。

これではだめだと服をたたんで、それらをかごに入れて担ぐ。早く返さないと、この下着でとんでもないことをしでかしそうな気がした。

二階から四階まで、各部屋に衣服を配る。この時間なので、部屋にいるのは三〇六号室

の物部さんと、五〇六号室の秋山さんだけだ。
物部さんは夕方出勤だからいいとして、秋山さんはいったい何をしているのだろう。時々どこかへふらっと出かけるし、家賃はきっちり本人が払うから、単なる引きこもりってことはないのだろうけれど。
考えながら二階に下りると、
「あら大家さん。ご苦労様」
ちょうど仕事が終わったのか、玄関先に三島則子が帰ってきていた。
「お帰りなさい、三島さん」
「ただいま」
ここで彼女はにっと、ちょっと意地の悪そうな笑みを浮かべて、
「ふふっ、折角だからメイド服を着て、『お帰りなさいませ、ご主人様』って言ってくれると嬉しいんだけど」
「そんなことをして、いったい誰が喜ぶって言うんですか」
「寮のみんなが喜ぶと思うけど。アンケートでも採ってみる？　賛成多数で採用ってことで」
「いやですよ」
冗談か本気か判らないし、あまりつっこまれても困るので、話題をそらすことにする。
「今日は早いお帰りですね」
「そりゃあ、現役生ばっかりだったら夜授業だけなんだけど、そうでない子は昼間だって暇だもの。ね、大家さん？」
苦笑するしかない。俺もその、「そうではない子」の一人だ。今のところ予備校には通わず、自宅学習だけですませているが。
「よけいなお世話かも知れないけれど、ちゃんと勉強してる？　だめよ、浪人生だからって、『夏から頑張ればいいや』なんてたかをくくってたら。現役生はいまから勉強してるんだから」
「大丈夫ですよ、毎日勉強してますから」
「受験を舐めたらだめ。自分一人じゃ限界もあるし、追い込みって時になって急に不安に感じるものだから。――そうだ」
彼女はぱちんと、子供っぽい仕草で両手を打ち鳴らし、
「なんなら私が、教えてあげましょうか？」
「え……いえ、嬉しいんですけど、さすがにそれは申し訳ないって言うか」
「遠慮しないで。授業料を取るつもりはないから。君は確か、文系大学志望だったわよね？　だったら私一人でも、充分に教えられるわ」
どうしよう。学習塾に通うつもりはなかったのだが、それで大学受験を乗り切るのはかなり難しいかも知れない。
「判りました。じゃあ、ご厚意ありがたく受けさせてもらいます」

「決まりね。あとで志望校と、必要な科目を書き出しておいてちょうだい。理科も、生物と地学だったら充分に教えてあげられるから」
「理科も大丈夫なんですか？　確か文系教科の先生だって」
「生物と地学は文系よ。特に受験の場合は」
軽い調子で答えて、三島さんは二階に上がっていった。
さて、洗濯が終われば、六時頃まで暇だ。部屋に戻って、志望校の必要教科を書き出しておこう。
管理人室に戻る。と、
「あ」
とんでもないものが、管理人室の畳に転がっていた。
柔らかな金色の、ブラとショーツのセット。
ネットから出したまま忘れていた、三島さんの下着一式だ。
やばい、どうしよう。ちょうど今日は帰ってきているし、ということはすぐに洗濯物を片付けるに違いなく、とうぜん下着がないことに気づいて、俺の部屋に――

ピンポン。

「大家さん、ちょっといいかしら」
想像通りにチャイムが鳴り、三島さんが訪ねてきた。
若い男が、部屋に自分の下着を持っている。こんなところを見られたら、どんな誤解をされるか――
いや、大丈夫大丈夫。俺は自分に言い聞かせた。単にしまい忘れただけなのだから、「ごめーん入れ忘れちゃった、へてっ」でゆるされるはずだ。最後のてへっ、は余計だろうけれど。
俺は下着を手に玄関に向かい、
「どうぞ、開いてます」
「失礼します――って、あ、やっぱり」
私服のワンピースに着替えてから訪ねてきたらしい三島さんは、すぐに俺の手の中にある布きれに目をやった。そしてその目をほんのわずかだけ上に動かして、俺の顔を見た。
「……」
まずい。三島さんが、あからさまな疑惑と不審の目で俺を見てる。
「えーと……あの、どうぞ」
「……嗅いだの？」
「か、嗅いでませんっ！」
やっぱり誤解されてる！
「じゃあどうして、私の下着がそこにあるの？」

「乾燥機から出したあと、整理してたら入れ忘れただけです。本当に」
下着を差し出すが、三島さんはじっと俺を見つめて、受け取ろうとしない。
「入れ忘れた、ねぇ……もうちょっと上手い言い訳を考えたらいかが？」
「い、言い訳なんかじゃ……」
「湿ってる」
彼女が指さした先を見下ろして、絶句する。普段着にしているスウェットの股間に、小さなシミが出来ていた。さっき昂奮したときに漏れそうだった先走りが、後からしみ出してきたらしい。
「こ、これはその……水汚れです」
「別にいいのよ、隠さなくても。男の子なんだから、興味を持ってもおかしくないわ」
三島さんの声が、ピンク色を帯びる。彼女は後ろ手にドアを閉め、器用に鍵をかけて、部屋にあがる。
「奥に行きましょ。ここだと、誰かに聞かれるかも知れないから」
手首を引っ張られた。そのまま、奥の寝室まで連れて行かれる。
「ふぅん、けっこう綺麗にしてるのね。男の子の部屋だから、もっと汚いかと思った」
三島さんが何か言ってたけど、ほとんど聞いていなかった。
だって、これはその、女教師・三島則子の保健体育実践授業か。いやそんな、どこのＡＶだよ！？　そんな展開があり得るはずが、
「ここなら、大丈夫ね。さぁ、ベッドに腰掛けて、下を脱いで」
あった！　脱げって、つまりその、はい。
「み、三島さん、脱いでって、その……」
「どうしたの？　脱ぎなさいって言ってるの。先生の言うことは、ちゃんと聞かなくちゃだめでしょ」
「は、はい、三島先生……」
俺は言われるがままに、シャツを脱ぎ散らかしてあるベッドに腰掛けて、スウェットを脱いだ。
トランクスも脱いだ方がいいのかな？　と思った瞬間、三島さんの腕がするりと伸びて、俺のトランクスをするりと脱がせてしまった。
「わっ！？」
「ほら、パンツも脱ぎなさいよ」
トランクスが脱げた拍子に、チンコがメトロノームのように揺れる。恥ずかしくって反射的に隠すと、
「どうしたの？　見られるのを恥ずかしがる年でもないでしょ？　あら、それとももしかして――童貞？」
「ち、ちちちちがいますよっ！」
いや、本当は童貞で、女の子とつきあったこともないけど、でもこんなところで認めら

れるか！
「嘘ついても、無駄よ。経験があれば、もっと余裕があるはずだもの。女に見られたくらいであわてふためいて隠すなんて、童貞の証拠」
「うっ……」
「手をどけなさい。まだ全部、服を脱ぎ終わってないでしょ？」
「ふ、服って……？」
疑問に思っていると、三島さんは答えずに、股間を隠す俺の手を払いのけた。
ついに遮蔽物を失ったチンコは、既にかなりいきり立っていた。他人と比べたことがないのでよく判らないが、栄養ドリンクの瓶くらいの大きさだ。
小さいと、良くポーク○ッツと馬鹿にされるらしい。だからこれくらいなら、それほど小さくはないだろう――
「あら、可愛い」
「えっ」
これで小さいの！？
愕然とする俺に向かって、三島さんは俺のチンコを指先でつつき、
「まだ勃起しきってないならこのくらいかも知れないけれど、フルでこれだったら小さい方ね。亀頭の一番太いところがトイレットペーパーの芯が通るかどうかが大まかな目安だけど、いまくらいなら楽々通るでしょ？」
「うっ……」
そ、そうだったのか……
「いや、まだのびるから！」
「そう、じゃあ応援してあげる。まずは、お洋服を脱がせてあげないとね」
「洋服……ひゃあっ？」
もう下着まで全部脱いだんだけどと思っていると、いきなりチンコを握り込まれ、ずるりと皮を剥かれた。尖端が先走りで湿った亀頭が外気に触れて、ひやりと背筋まで冷たくなる。
三島さんの言ってた「洋服」ってもしかして……。
「日本人は包茎のほうがふつうだけど、おっきくなるときにはちゃんと剥けていないと恥ずかしいわよ？」
は、恥ずかしい……そうだ、俺くらいの年になっていれば、もう向けているのがふつうなんだ。確かに包茎のほうが多いって話はあるけれど、女性の目の前でまで皮をかぶせたままだなんて、とんだ赤っ恥だ。それに、勃起してもかぶったままなんだから……
羞恥心がこみ上げる――と同時に、チンコがぴくりとうずいた。
「あら？」
彼女もすぐに、気づいたらしい。
「いま、おちんちんが動いたわね。ふふっ、もしかして言葉責めに弱いのかしら、この、

包茎短小おちんちんは」
「うっ……」
びくん。今度はもっとはっきりと、まるでうなずくように亀頭が揺れた。
「あははっ、あなた、もしかしてＭ？」
「ちっ、違います！」
「本当かしら？　マゾヒストでもたいてい、自分はマゾじゃないって言うものよ。マゾヒストとしてカミングアウトするくらいの人をのぞいてね。本当にマゾじゃないって言うんなら――」
彼女はにっとサディスティックに笑って、
「テスト、してみましょ」
「て、テストっていったい、何をするつもりですか！？」
一瞬、恐ろしい想像が脳裏を駆け抜けた。
裸に剥かれた俺は、手足を縛られて床に仰向けに転がされ、それをボンデージ姿の三島さんが、サディスティックな笑みを浮かべて見下ろしている。その手には、乗馬用のムチと真っ赤なロウソク。
（ふふっ、裸で縛られてるのに、なんでこんなにおちんちんを大きくしてるのかしら？　みっともないわね、こんなもの、踏みつぶしてあげるわ！）
激痛に身もだえる俺。
彼女は容赦なく、カチコチになった俺のチンコを踏みまくる。さらに彼女がムチを振り下ろすと、俺は屠殺される豚のように、悲鳴を上げてのたうち回る。その傷口にロウソクが垂らされ、皮膚と肉の焦げる音が……
「あれ、へたっちゃってる」
三島さんの気の抜けたような声が、想像の囚人になっていた俺を解放してくれた。そりゃそうだ、あんな痛そうなことをされて、誰が昂奮するかっての。
「どうせハードＳＭみたいなの想像して、痛そうだなんて思ったんでしょ。私はそんなこと、しないわよ。縛ってひっぱたいたって、おもしろくも何ともないもの」
「あ、Ｓじゃないんだ、良かった……」
「ううん、Ｓよ」
安堵した途端に否定された。
「でもＳにもいろいろあって、殴る蹴るは趣味じゃないの。私はむしろこっち」
彼女は俺の目の前に、金色の布地をひらひらさせた。言うまでもなく、先ほど俺の手から取り返したブラとショーツだ。
「ねぇ、これを着せられたら、恥ずかしいと思わない？」
「……」
答えられなかった。
目の前に揺れる下着を、自分が穿く――考えた途端、股間が暴れ回るようにむずつく。

ふくれあがる衝動が押さえきれずに、チンコがむくむくと起きあがって、さっき以上に大きくなったのだ。
お、おちつけ！　これはただの布だ。こんなもので勃起するわけには、
「あら、すごい。さっきよりずっと大きくなってるじゃない。想像しただけで、おっきしちゃうのかしら？」
「ちっ、違います！」
「そう、ふぅん。ならテストよ。両足をそろえて、こっちに向けて」
躊躇う。大丈夫、どんなテストをされようが俺はマゾヒストじゃないと思いつつも、不安は去らない。
「さぁ、早く。それとも自分がマゾヒストだってばれるのが怖いかしら？」
判りやすい挑発だった。しかし、載らないわけにはいかない。
俺は黙って、両足をそろえて彼女に差し出す。
すると彼女はあろう事か、自分の下着を俺に穿かせはじめ――
「なっ、なにを！」
「暴れないで！　おとなしくしてなさい！」
年上の一喝に体がすくみ、抵抗できない。
いや、抵抗しようとかこの場を切り抜けようとか、そういった意欲がごっそりと失われてることに、自分で驚いた。
その間にも三島さんの手は動き続け、ふくらはぎから膝を通過し、太ももの半ばほど間で、ナイロンがすべすべレースがちくちくの下着を穿かされてしまっていた。
「後は自分で、穿きなさい。もしそれを穿いて、おちんちんが小さいままだったら合格よ。でも、もし大きくしてたら――」
彼女はにんまりと、俺の顔ではなく股間を見て、唇をつり上げた。
「あなたは女装趣味のマゾヒスト決定」
「くっ……」
奥歯が、ぎりっと鳴った。
悔しい。悔しいが、テストの可否は火を見るよりも明らかだった。
俺のチンコは、さっきからがちがちに勃起して、剥き出しになった亀頭には我慢汁が露を結んでいる。どう見ても、完全勃起だ。
「どうしたの？　さ、ちゃんと穿いてご覧なさい」
「うっ……」
三島さんは意地が悪い。こんなにがちがちに勃起しているのに、穿けるわけがないじゃないか。
「ふふっ、そうよね。こんな邪魔なものが生えてたら、穿けるわけがないわよね。それなら――」
勃起したチンコを、彼女の指が優しく包み込む。

薄い皮膚が露出して敏感になった俺のチンコは、たったそれだけで大きくけいれんし、同時に痛さと気持ちよさの火花が背筋を伝って、頭で爆発した。
ほんのちょっと触られただけで、絶頂に達してしまいそうだ。
「やっ、やめてくださいっ、お願いですから……！」
「だーめ。ほら、これが気持ちいいんでしょ？」
先走りのしたたるかり首に指を這わされたとたん、俺は訳のわからない声をあげた。甲高くかすれた、熱っぽい声を。
三島さんは俺に覆い被さるようにして顔を近づけ、
「あら、可愛い鳴き声。ふふっ、鳴かぬなら、鳴かせて見せようホトトギスってね。ちなみに誰のことを言ってるか判るかしら？」
「と、徳川、家康……あっ！？」
「残念、正解は秀吉よ。間違えたお仕置き」
ぎゅっ、と痛いほどにチンコの根本を握り込まれて、俺は悲鳴を上げた。まるで歯磨き粉のチューブを握りつぶしたときのように、大量の透明な露が亀頭の尖端からあふれ出す。
「どう？　これでもまだ、自分はマゾじゃないというつもり？　認めちゃった方が、楽になるわよ？」
「うっ、うぁっ、痛いっ、やめっ、離して……あぁっ！？」
「気持ちいいんでしょ？　男のくせに女物の下着を身につけて、おちんちんを大きくして、いまにも射精しそうじゃない。これが女装マゾじゃなくて、なんなのよ？」
「こっ、これはっ、あっ、単に、下着に昂奮してるだけで……んぁっ！？　だ、誰も、下着を穿きたいとか、そんなことは思って……」
「嘘ね」
くすくすと、耳元で笑い声がささやく。
「ふつうの男も女性の下着で昂奮することはあるけど、自分で身に付けることは絶対にないもの。どちらかって言うと匂いを嗅いだり、かぶったり、ほおずりしたり、舐めたり、あるいは大量に蒐集したり――でも、自分では絶対にはかない」
「うっ……」
「自分で下着を穿いて昂奮するのは女装マゾだけよ。ほら、上も脱いで」
抵抗する間もなく、両袖を掴まれて、いきなりスウェットの上まで脱がされた。
「さっ、寒いっ……」
いくら室内とはいえまだ四月、ショーツ一枚ではいくら何でも寒すぎる。いろいろな意味でさめた。太ももをそろえ、寒さに肘を抱いて太ももをこすりあわせていると、
「それも。つけていいわよ」
その太ももに何かが落ちてきた。ショーツと同色で、半円形の布地を二つつなげ、その両脇から大きな輪っかが飛び出した形状のそれは、
「ぶ、ブラジャー……？」

「ええ。女装には必須のアイテムでしょ？　ショーツを穿いて昂奮するんだもの、ブラジャーを着けたら、それだけで射精しちゃうんじゃないかしら」
「そ、そんなことあるわけが……」
「ないって言える？　そう。なら、ブラジャーを着ける間での間に勃起が収まったら、これでおしまいにしてあげる。ただし、射精して収まるのはなしよ」
反論に窮するあいだに、目の前にブラジャーを広げられた。ストラップが「ここに腕を通しなさい」とでも言うように揺れている。
「……」
ごくりとつばを飲み込んで、俺はストラップに腕を通した。
すかさず三島さんが後ろに回り、同時にきゅっと、胸の下と肩が締め付けられる。背後のホックを留めたらしい。
「ブラジャーデビューのご感想は？　ふふっ、一九でブラジャーデビューなんて、女の子だったら遅すぎるくらいね」
「お、俺は男だって！」
「ふぅん、なら教えてくれる？　男の子は何歳くらいでブラジャーデビューするのがふつうなの？」
「くっ……」
自分の胸を見下ろすと、平らな胸にまるで不釣り合いな、大きなカップのブラジャーがついていた。ストラップはリボンが花のような形になっていて、カップの口には刺繍のようなレースのバラが踊る。
そして胸回りに感じる、強烈な締め付け感。あまりにも慣れない女性用下着の感覚に、腰の奥がきゅっと締め上げられるようになり、チンコは萎縮するどころかいっそう激しくいきり立った。
「見なさい。ブラジャーを着けたら、いっそう大きくなったじゃない。これでもまだ、女装マゾじゃないって言い張るつもり？」
もう、言えなかった。
俺だって若い男だから、これまでＡＶを見たりエロ漫画を見たりしているけれど、今日ほど昂奮したことはいままでになかった。
「もう今更、恥ずかしがることも、隠すこともないでしょ？　認めちゃいなさい。自分は女装して昂奮する変態マゾ男です、ってね」
「そ、それは……」
言えるわけがない。
いくら何でも自分の口から、俺は女装マゾ男だなどと、言えるものか。
しかし彼女の執拗な性格を考えると、俺がそういうまで、絶対に許してはくれないだろう。いったい、どうすれば――
「ん、やっぱり言わなくていいわ。――本人が認めたがらないままでむりやり女装させた

方が、面白そうだし、自分は女装マゾなんだって開き直られたら、つまらないもの」
「へ？　今なんて……」
「なんにも言ってないわ。それより、若山くん」
三島さんは立ち上がって、ワンピースの裾をつまんで広げてみせると、
「このワンピース、どう？　なかなか可愛いと思わない？」
「う、うん。よく似合ってると思いますけど……」
最近流行りのレトロファッションで、大きな襟にリボンがゆれる長袖の花柄ワンピース。前には飾りボタンが並び、ウエストからは大きく裾の広がったスカートになっていて、裾からレースがのぞいていた。
なかなか可愛いデザインだし、三島さんにも似合っている。
「そうじゃなくて――ねぇ、このワンピース、着てみたいと思わない？」
「お、俺が……？」
「そう、あなたが」
俺が、そのワンピースを着る。そんなの、考えただけで――
「は、恥ずかしくって着られるか！　お、俺は、男なのに……」
「そう、ふぅん……なら、こうしたらどうかしら？」
含み笑いをしながら、三島さんは器用に背後のファスナーを下ろして、ワンピースを脱ぎ始めた。
その光景に、俺は見とれた。
ブラジャーを着けただけで上乳がのぞいている彼女の胸ではない。薄い下着に陰毛の黒が透けている陰部でもない。
彼女が床に脱ぎ捨てたそのワンピースから、視線をはずすことが出来なかったのだ。
レトロで可愛い、ワンピース。あれを着たら、どんな気分だろう。柔らかな生地が状態から腕を多い、腰から下にスカートが揺れる。
ぞくっとした。目で見て確認するまでもなく、いきり立ったチンコがうずき、カウパーを垂らしているのが判る。
その服のすぐ上には、スタイルのいい女性の下着姿があるというのに。
「ふふっ、やっぱりね。あなたが一番好きなのは、女性の体でも、セックスでもない。女性の着ている服、そのものなのよ。エッチな本やビデオを選ぶときでも、コスプレとか、女子高生ものとか、そういうのが多かったんじゃないかしら」
「う……」
図星だった。
メイド、女子高生、ロリータ、ナース。俺が今までに見てきたのはそんなのばっかりで、ふつうのＡＶ――メジャーな作品は、ほとんど見たことがない。唯一見たのだって、女優の着ていた服が可愛かったからという理由だ。
黙っていると、三島さんは足下から服を拾い上げて、俺に向かって差し出した。

「さぁ、着なさい。それともそのまんまの恰好でいたいのかしら？」
悪魔がささやく。三島さんの声に似ているような気もしたけれど、俺にはどっちでも同じようなものだ。
「立って。ショーツをちゃんとはきなさい」
ベッドから立ち上がり、ショーツに指をかけてずり上げる。
一番上まで引き上げると、まるで下半身を密閉するようにはりつき、ビキニラインに沿ってちくちくとレースが肌を突き出した。
女物の下着だ。こんな履き心地は、男物の下着ではあり得ない。
俺、女の下着を着けているんだ――考えた途端に、チンコが激しくうずく。
勃起したチンコは薄いショーツの中には入りきらず、まるで詰めすぎたトランクのように、いくら押し込んでも飛び出して、ショーツの中から無様に飛び出してしまう。
「は、入りきらない……」
「あらあら、すっかり大きくなっちゃってるわね。ブラジャーとショーツだけでそんなに昂奮しちゃうんだ、このワンピースを着たら、いったいどうなっちゃうかしら」
三島さんは今さっき脱いだワンピースを、大きく開いた背中のファスナーを向ける形で差し出した。
「肩のところを持って、ファスナーからスカートに脚を通して」
「でも、このままじゃ、その……ワンピースが、汚れちゃいますよ」
受け取りながら答えると、
「構わないわよ。このワンピースは、君にプレゼントすることにするから。かわりに、私はこっちをもらうわ」
そういって、三島さんは俺の足下からスウェットを拾い上げて、ぱっぱと身に付けた。
もう、このワンピースを着るしかない。
俺は大川に飛び込むくらいの覚悟で、スカートに脚を通した。右脚、左脚と通して、ワンピースの肩を引っ張って持ち上げる。
「うっ……」
チンコの尖端に、スカートがずずずずずっ、とこすれて痛かった。それだけで射精してしまいそうなほどの刺激だ。
「どう？　初めてのスカートは。気持ちいいでしょ？」
「そっ、そんなことはっ、はぁっ……」
冷静に反論しようとしたが、吐息のせいで口調が乱れ、まともに声にならない。
スカートが、こんなに気持ちのいいものだなんて――
ズボンと違って、太ももをぜんぜん覆わない。頼りないと言うよりも、本当に服を着ているのか不安になるほどだ。さんざん同級生たちのパンチラを見ておきながらいうのもなんだが、ズボンのように下着をきっちり隠すことが出来ないというのは、ひどく落ち着かなかった。

頼りなくて、不安で、恥ずかしくて、落ち着かない――でも、昂奮する。気持ちいい。
「次は袖よ。片腕ずつ、通しなさい」
まるで作業用のつなぎを着るように、俺は袖に腕を通した。
腕から肩にかけてすっぽりと布地に包まれる。それは男物の服と変わらないはずなのに、この服が女性用のものなのだと考えるだけで、全く別の感覚があるから不思議だ。
まるで自分が「女」に包まれ、女に変わっていくような不思議な感覚。
たとえるなら、女の皮をかぶせられているような。
しかし下半身では、女ではないことを象徴するものが、激しい自己主張をしている。スカートの前を持ち上げて、シミを付けるほどに。
思わずスカートの中に手を入れて、暴れ回るそいつを押さえつけたくなる。
そんな衝動をこらえながら、俺はワンピースを肩まで着て、すっぽりと着込んでしまった。ホックを閉じると、胸郭に溜まった熱を吐き出す。
「はぁ、はぁ……」
「後はファスナーを閉じるだけね。後ろ、向いて」
俺は彼女に背を向けた。
待ち受けるように自分の体を見下ろすと、自分が着ている花柄ワンピースのデザインがよく判る。大きな襟も、飾りボタンの付いている前立ても、ふんわりと広がったスカートの裾も――大人らしさを持ちながら、とても可愛いデザインだ。
やっぱり、恥ずかしい。
胸元は少し膨らんでいる。もちろん俺におっぱいが付いているからではなくて、下に着けているブラジャーのせいだ。ブラの締め付けは想像以上にきつく、思わず背筋が伸びる。
そんなことを考えていると、

じーっ、

背中で、ファスナーの閉じる音がした。
まるでこの女の服に閉じこめられているようで、恐ろしさに身がすくむ。しかしそれは、官能的な恐怖だった。なぜ恐怖が官能的なのか自分でも判らない。
考えに凍り付いている間にも、背中のファスナーはどんどん俺の体をかくし、とうとう俺の背中はワンピースによって覆われてしまった。
「はいできた。どう？　女の子になった気分は？」
「い、いわないでくれ、恥ずかしい……」
「恥ずかしがることないわ。とても似合ってるもの。嘘だと思うなら、鏡で見てご覧なさい。ほら」
三島さんの言葉に釣られて振り返ると、すぐ近くにあったクローゼットの扉が開いていた。内側には鏡が付いていて、そこにはワンピースを着た無様な俺の姿が――

「え……？」
目を疑った。
鏡に映っていたのは、無様な女装姿をさらした一九の男ではなく、不安そうな表情がなかなか可愛い少女だった。やや短いショートカットと、一昔前のアイドルめいた顔立ちに、レトロなワンピースがよく似合っている。
でも、これは――
「お、俺……？」
疑問が口をついて出る――と、鏡の中の少女も口を動かした。
少女の後ろに立っているスウェット姿の三島さんは、
「そうよ。これが、あなた。ふふっ、なかなかに会ってるじゃない。メイクもヘアセットもしてないのにこれだけ似合うだなんて、妬けるわね。若さの特権かしら」
「そんな……」
確かに昔から女顔だといわれ続けていたが、まさかここまでなるなんて。
「ここまで可愛いと、本当は女の子なんじゃないかって疑いたくなるわ。でも――」
「ひぃっ！？」
いきなりワンピースのスカート越しに、シルエットが判るほど硬くいきり立ったチンコを握られて、俺はうわずった悲鳴を上げた。
「っふふ、ここはちゃあんと、男の子みたいね。ねぇ、恥ずかしくないの？　男の子のくせにこんな可愛いワンピースを着て、下着まで着けてるだなんて。他の入居者――そうね、女子高生の夏ちゃんとか、湊ちゃんあたりが知ったらどう思うかしら？」
「いやっ、ほっ、他の人にはっ、あぁっ！？」
チンコを握っている三島さんの指が動く。
たったそれだけで、自分でもびっくりするくらいいやらしい喘ぎ声が出た。
気持ちいいのだ。剥き出しの亀頭を、布地のざらざらとした感覚がこすって、痛いくらいに気持ちいい。
「はぁっ、はぁっ、はぁっ、はぁっ……」
「そんなに女の子の服が、気持ちいいの？　ならこれから毎日、女の子の服を着ていたらどうかしら。いろいろ着せてあげるわよ。ミニスカートもあるし、実家から高校時代の制服を持ってきてあげてもいいわ。女子高生の制服なんて、本当は着たくて着たくてたまらないでしょ？」
「そっ、そんなことっ、はぁっ、あるわけが……俺は、お、男なのに……っ！」
「そうよね。若本光樹くんは、立派な、男の子よね？」
「きゃああっ！？」
いきなりスカートの前をめくられて、俺は思わず泣き叫んだ。
女の子みたいな悲鳴が出てしまったことも恥ずかしいが、それ以上に、めくれたワンピースの前から真っ赤に腫れ上がったようなチンコが露出して、さらにそれを女性の手で握

られて、恥ずかしさは限界に達する。
「やめっ、おちんちんみないでぇっ！」
「あら、ずいぶん大きくなったじゃない。でも、女の子の服を着るのにはちょっと邪魔ね。このままじゃ、スカートの上からでも目立って仕方ないわ」
「あっ、いやっ、やめっ、こすらないでっ、ああぁっ！？」
彼女の指が動くたび、理性がはじけ飛びそうになる。
自分の指でしているときとは全く違う。
どう動くか判らない。何をされるか判らない。
竿を激しくしごき立てたかと思えば緩やかになり、安心した瞬間にかり首をつー……となぞられてくすぐったさに身もだえさせられる。自慰の時にはほとんど触れない玉袋も、彼女の指は積極的にもみ上げていた。
「あぁっ、はぁっ……ひっ、あああああっ、いやっ、ああぁっ！？　……はぁ、はぁっ、いっ、いやっ、ああああああっ！？」
ただ女性用の下着やワンピースを着ているだけで、激しく昂奮している。こんな状態で激しくチンコを弄られると、今度こそ絶頂に達しそうになり――
「あっ、いやっ、出るっ、出ちゃうーっ！」
「まだ、だーめ」
その途端、チンコの根本をぎゅっと握られた。
「ほら、ちゃんと鏡で見てご覧なさい。今の自分が、どんなに恥ずかしいことになってるか」
「やっ、い、いわないでっ……！」
言われなくても判っている。さっきから、ピンクの靄がかかったような視界の中心に、目の前の鏡が見えているのだから。
ワンピース姿の俺は、背後からまるで痴漢のように組み付いている三島さんにスカートの裾をめくられ、チンコからショーツ、太ももまで丸出しにしてしまっている。
亀頭は今にも破裂して血をまき散らしそうなほど真っ赤にふくれあがり、先走りでローションをかけたようにぬらぬらと光っていた。
こんな痴態を、三島さんに見られている――
「ねぇ、若山くん。女の子の服って、気持ちいいでしょ？　スカートを穿いてると、それだけで昂奮するでしょ？」
「あっ、あぁっ、はっ、はいっ、あぁっ……！」
気持ちいい。下着、ワンピース。女物の服を着ているとこの上なく恥ずかしいのに、この上なく気持ちいい。
「若山くんは、女の子の服を着ておちんちんを弄られるのが気持ちいいのよね。女の子になりたいのかしら？」
「うっ、いやっ、俺はっ、はぁっ、女になんてなりたくはっ……！」

「じゃあ、なんなの？　男のくせに女の子の服を着ているって変態的な行為に昂奮するの？　恥ずかしくて、屈辱的で、でもそれが気持ちいいんでしょ？　そっちのほうが、よっぽど変態ね」

言葉に詰まる。唇をかんで、彼女の指の動きに射精しそうになるのを懸命にこらえる。俺はそんな変態じゃない――といいたかったが、鏡の前の自分は、女装に昂奮しきった変態そのものだ。

すると三島さんは。

「ふふっ、口よりもこっちのほうが、素直に答えてくれそうね」

「あっ、あああぁぁっ！？」

激しくチンコをしごきあげられて、俺は悲鳴を上げた。これまでの動きがほんの前戯にすぎなかったかのように、激しい動き。チンコ全体が甘く痺れ、びくんびくんとけいれんする。

自分がどんな顔をしているのか、何を叫んでいるのか、もう全く判らない。頭の中が真っ白になって、ただ喘ぎ、悶え、叫ぶことしかできない。

出る。出る。出てしまう。

こんな、女装したままで、女の子のように背後からスカートをめくりあげられて、チンコを弄られて――射精してしまう。

くちゅっ、くちゅっ、くちゅっ、くちゅっ……

チンコは射精を渇望する。膨張し、痙攣し、寄生生物のように俺の意志とは無関係に動き回り、白い体液を吐き出す瞬間を待ち受ける。

俺はそれを必死に我慢する。女物の服や下着を身につけて昂奮するこの駢馬を必死に押さえつけようとする。こんな屈辱的な恰好で射精する恥ずかしさを回避しようとする。

イきたい。イきたい。

いやだ、いやだ、

相反する二つの感情がせめぎ合う。

それは、射精をするかしないかというプラスとマイナスではない。羞恥と昂奮が入り交じったものとして、ともに絶頂に向かうためのエネルギーになってしまっている。

まるで二本の脚を交互に前に出して歩くように。

くちゅくちゅくちゅくちゅっ！

はぁっ、はぁっ、はぁっはぁっ、はぁっあっあっあっあっあああああああああっ！？

誰かの喘ぎ声が聞こえる。誰の喘ぎ声だろう。男に犯されている女のような、リズミカルな喘ぎ声だった。

イきなさい。
はしたない声を上げて、女の子のようにイきなさい。
悪魔のような声が、理性の鎖を断ち切った。
限界だった。
「イくっ、ああっ、もうだめっ、イくっ、イっちゃうううぅぅぅっ！」
体温が急激に低下するような錯覚があった。
「はぁ……」
吐息が熱っぽい。
いつの間にか、俺は床にくずおれていた。スカートが床に広がって――って、ええっ！？
なんで俺、こんなものを着て、えっ、そんな――
「こ、これ……！」
先ほどまでの記憶が、一瞬でよみがえる。
そうだ、俺は女物の下着をつけられ、ワンピースを着せられて、その上チンコを弄られて射精してしまったのだ。
思い出すと、体のあちこちに違和感を覚える。
胸回りを、まるで縛りプレイのように締め付けるブラジャー。
下腹部を覆うぴちぴちのショーツは、ラインに沿ってレースが肌を刺し、今自分が身に付けている下着の形状を思い出させる。
ワンピースも、形はふつうのシャツと同じはずなのに、これが女の服だと思うだけで、触れている部分にかゆみが走る。
こんな――こんなもの、恥ずかしくって着ていられるか！
「うっ……」
どうすればいいのかちょっと迷ってから、俺はようやく、背中のホックとファスナーに思い至った。急いで背中に手を回して脱ごうとして、
「だめ」
俺の手を、誰かの手が掴んだ。びっくりして振り向くと、三島さんがにっこり笑って立っていた。
「すぐに脱いだら、つまらないでしょ。まるで、射精するためだけに女装したみたいじゃない。しばらくそのままでいなさい」
「そ、そんな――」
「それに、そのワンピースはちょっとサイズが小さいから――身長は私のほうが高いけど、男の子の君のほうが肩幅はあるのよね。だから、君がいくら頑張っても脱げないと思うわ」

「うっ……」
そんな馬鹿な。こんなもの脱いでやる。背を後ろに回して、ファスナーを下ろし――下ろ――
「ほら、ね。脱げないでしょ。あきらめてそのままでいなさい」
すかさず三島さんの手がやってきて、中途半端に降りたファスナーをもう一度あげられ、ホックも留められてしまった。
「やっ、やめて、もう、脱がさせて……」
「恥ずかしい？　女装したままおちんちんを弄られて、あんなにはしたないよがり声を上げておいて？　イくっ、イっちゃうって、初体験の女の子みたいな大声を上げてたわよ。もしかしたら、他の人たちにも聞かれちゃったかも知れないわ」
「そ、そんな……」
叫ぼうとして息を吸い込んだとき、俺はようやく、花盛りの栗林に近づいたときのような濃密な青臭さに気づいた。
精液の匂いだ。
目の前の畳の上に、黄色っぽいどろどろした液体が飛び散っていた。俺の精液だろうが、見たことのない量と、飛距離だ。粘りけのある精液なのに、チンコから一メートル近くも飛んでいる。
ワンピースを汚してしまったんじゃないだろうか――心配になって、スカートをめくる。女物のショーツから飛び出したチンコは、今は完全にしおれきって、亀頭の根本に皮が重なっている。その尖端にはどろりと精液の残滓があったが、奇跡的にスカートの裏側はほとんど汚れていない。少し濡れているのは、最初に付いた先走りだろう。
「さすがにザーメンまみれになったら、着られなくなっちゃうからね。これから先も着ることになるんだから、付かないようにしてあげたわ」
「こ、これから、先……」
まだこの後も、これを着ろというのか。愕然と凍り付いていると、背後にいた三島さんは立ち上がって、部屋の出口に向かっていった。
「ちょっと、どこへ……」
「帰るの。明日の授業の準備もしなくちゃいけないし、それに新しく個人授業の生徒も増えるから。ね、若山くん？」
俺のことを言っているのだ。個人授業を受けさせてもらえるのはありがたい――って、いま問題なのはそうじゃなくて！
「お願いですから、脱ぐの手伝ってくださいよ！　こんな服を着てるところを見られたら、俺は――」
「夕飯前にもう一度来るから、そのときにワンピースを脱がせてあげるわ。ああ、脱げるからって、ショーツを脱いだらだめよ。脱いでるのを見つけたら、ワンピースを脱ぐのも手伝ってあげないからね」

夕飯前ってことは、彼女が来る時間によっては、ワンピースにエプロンをつけて料理をしなければならないってことか。

飛び散った精液を拭き取りながら、俺はがっくりと肩を落とした。

……彼女が俺の部屋に戻ってワンピースを脱がせてくれたのは、夕食直前のことだった。

ブラジャーとショーツはそのまま、食堂で入居者の女性たちと食事をしている間も、スウェットの下につけたまま。

ばれなくて良かったけど、秋山さんが無表情な目でじーっと俺の胸元を見ていたせいで、背中は冷や汗だらけ。しかも――ズボンの中では、ショーツに覆われたチンコが痛いほどに勃起していたのは、絶対に知られるわけにはいかなかった。

（サンプル版は以上です。続きは製品版でお楽しみ下さい）